

# 中学校音楽科鑑賞領域におけるパフォーマンス評価の導入

岐阜市立東長良中学校 薄田 茂樹  
教職実践開発専攻 原田 信之

キーワード：パフォーマンス課題、ルーブリック、NAEP、実物・実演の評価規準（ルーブリック・サンプル）

## I. はじめに ～高次の学力を育成する教育評価への転換～

2001年に改訂された指導要録以来、日本の学校の教育評価は、集団に準拠した評価（相対評価）から目標に準拠した評価（絶対評価）への転換を図ってきた<sup>1</sup>。いわゆる「相対評価」から「絶対評価」への転換は、日本の教育にとって、少なくとも、修得する学力の中身や学習者個人の能力の伸び具合に評価者の目を向けさせたという意味では、教育の本来の姿を取り戻すものであった。PISA や TIMSS の国際調査の結果が示すように、日本の子どもたちは学習に自信を失い、学習を好まず、学習の意義さえ見失っているといっても過言ではないだろう。入学試験偏重の教育は相対評価を助長し、平均よりも下位の子どもたちは、自己の学習成果に悲観的な心情を抱くしかなかった。負のイメージの強い学習評価の現状を打破するには、「目標に準拠した評価」をもとに、子どもたちが意欲をもち学習に立ち向かう姿を引き出すことのできる評価方法を開発していく必要がある<sup>2</sup>。

学習評価の転換に関し長崎は、「子どもたちが生涯にわたって学び続けなければならないという生涯学習社会にとってはなくてはならないものだ」とし、評価のあり方の転換は教育目標の転換に伴って実施されたとした上で、「生涯学習社会で自律的に生きていくためには、思考力・判断力・表現力の育成が急務であり、また、学び方、すなわち、情報の取り出し、解決の見通し、既習事項の活用、を学ぶことが求められている」という。そして「絶対的評価への転換は、子どもたちに学習の本質的な成果が身に付いていることを伝えるとともに、関心・意欲・態度の向上を支え、そして、生涯学習社会に必要な能力を育成することを目指した中で行われている<sup>3</sup>」とし、生涯学習社会を生き抜くための学力を身に付けさせるためにも、評価の転換が必要であると言及する。

また、国立教育政策研究所の「学校における持続可能な発展のための教育（ESD）に関する研究〔中間報告書〕」（2010年11月）でも、知識基盤社会を生きる上で「自己責任を果たし、他者と切磋琢磨しつつ、一定の役割を果たすために、基礎的・基本的な知識・理解の習得やそれらを活用して課題を見だし、解決するための思考力・判断力・表現力等が必要」であり、この知識・技能を陳腐化させないよう常に更新しながら「生涯にわたって学ぶことが求められており、学校教育はそのために重要な基盤である。」<sup>4</sup>と述べている。ここで重要なのは、2008年1月の中央教育審議会の答申内容と関連づけ、先進国共通の課題となっているESDの視点から今後の学力育成の展望が示されている点にほかならない。つまり、教育目標の転換に歩調を合わせ、教授・学習（授業）文化及び評価の在り方の転換に迫らなければ、より高度な学力の育成は持続性をもたないからである。

こうした高次の学力育成には、ウィギンズらが提唱する真正評価論にもとづくパフォーマンス評価の導入が有効だと考えられ、日本でも積極的な提案がなされているが、授業実践への定着については、従来のポートフォリオ評価がそうであったように、今後、徐々に浸透していくものとみられる。パフォーマンス評価を活用した豊かな授業の創造が新たな可能性を生み出すことになる。そこで本稿では、全米学力状況調査を通して作成された芸術教育フレームワークを対象にパフォーマンス評価の在り方を探り、見えにくい学力とい

われる知的活動性（パフォーマンス）を表出させるためのパフォーマンス課題やルーブリックの作成方法について検討する。これらアメリカの先行研究を踏まえ、これを日本の音楽科鑑賞の授業を対象に、パフォーマンス課題を単元に組み入れた授業開発を行うこととする。

## Ⅱ アメリカにおけるパフォーマンス評価の実際

### 1. 全米学力状況調査（NAEP）の概要と芸術教育（Arts）

1957年のスプートニク・ショックを契機に、アメリカの教育は様々な見直しが迫られた。全米の子どもたちの学力状況も重大な関心事となり、1969年には全米学力調査（The National Assessment of Educational Progress：NAEP）がスタートした。経年的に学力傾向を探るNAEPには「メイン NAEP」と「トレンド NAEP」の二種類がある。メイン NAEP は、社会や時代の変化に応じた教育課題に焦点を合わせた学力調査であり、トレンド NAEP の方は、調査対象教科について四則計算のような基礎学力を測定する調査である。

アメリカでの学力調査の動向について村木は、「PISA でもそうですが NAEP についても、アセスメントの重点が『何を知っているか (what they know)』よりも『何ができるか (what they can do)』に移ってきています。これだけインターネットなどの情報技術が発達している時代では、知識の有無そのものではなく、いかに情報を取り出して活用して、その結果として何ができるのか、そのパフォーマンスに関心が置かれます。つまり、NAEP もだんだんとパフォーマンス・アセスメントに近づいてきていると言えます。』<sup>5</sup>と述べ、知識基盤社会に求められる学力が反映していることを指摘する。池田もアセスメントの傾向について、「NAEP では採点や評価に手間がかかることを承知の上で、記述式問題、作文、芸術科のパフォーマンスに至るまで、解答構築式の設問に注力しています。現在はコンピュータ・シミュレーションを取り入れていますが、初期のころは理科実験の実技テストがありました。サンプル被験者にキットを与えて実験させ、それをビデオなどで記録し、実験の目的や考察について尋ね、科学的な思考力を探るのです。こうした技能テストの重視はアメリカの特徴で、例えば建築士の試験では実際に CAD を使って設計図を描かせます。解析には IRT を応用するか、もしくはそれができなければ、解答到達プロセスのプロトコルを抽出してそれを解析するスコアリング技術を使います。周知の通り TOEFL でもスピーキングのテストが始まることになりました。大人向けのテストにおける技能重視の伝統が初等中等教育を対象にした NAEP にも反映されているのでしょう。』<sup>6</sup>このように調査対象とする学力のアセスメントにおいて、パフォーマンス（知的活動性）まで調査対象とする動向が指摘されている<sup>7</sup>。

NAEP のホームページには、過去の調査で出題された問題やその問題の分析など様々な資料がアップされ、全米の教育水準を向上するための取組が実施されている。本稿では、NAEP のホームページ<sup>8</sup>に掲載されている芸術科（Arts）の資料を対象に、NAEP のパフォーマンス・アセスメントについて検討することとする。これ以下では、パフォーマンス評価という訳語を用いる。

そもそも「なぜ芸術教育にパフォーマンス評価が必要か」<sup>9</sup>という問いに対する言及から、NAEP の基本的な立場を把握しておく必要があり、その主なものを抜粋したものが表 1 である。

表 1 芸術教育におけるパフォーマンス評価の必要性<sup>10</sup>

- |  |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"><li>・音楽の音、ダンス、身体の動きが、絵の色や役者の顔の表情に見える感情は、代替言語である。</li><li>・芸術は、アイデアや感情を表出するため、コミュニケーションや学習したことを表出するために言語を超えた身体の動きで表出するものである。</li><li>・芸術教育は、教育改革の内容でも重要であり、一部の学者が指摘するように多重知能により形成されている。よって生徒が様々な方法で学ぶことがふさわしいと主張している。</li><li>・芸術的な経験の範囲は、教育や学習の視覚、運動、聴覚、および空間的な手段を提供している。</li><li>・芸術教育は多様な方法で生徒の成績を向上させることができる。</li></ul> |
|--|

## 2. NAEP が主張する芸術教育フレームワーク

2008年の学力調査時に、NAEPは評価の枠組（Arts Education Assessment Framework）<sup>11</sup>を示した。ここでは、芸術教育に関し第8学年を対象に実施された調査用の評価の枠組から、音楽の評価の部分を抜粋し、表2にまとめておく。

表2 NAEPによる音楽評価の枠組<sup>12</sup>（音楽の学習過程）

創造する－即興、作曲、編曲するとき
<ul style="list-style-type: none"> <li>・音楽の形式に適切な変更を加え、バリエーションと即興でつくることによって、歴史的、文化的、美的な理解を適用してください。</li> <li>・独創的な考えを表すために、標準的な記譜法（五線譜）／または非標準表記法（図形楽譜など）を使用してください。</li> <li>・独自の作品の連続したバージョンを評価し、純化して、修正してください。</li> <li>・音楽の要素の選択と使用の技術と表現の豊かさを示してください。</li> <li>・他の人のために創造された作品を発表してください。</li> </ul>
演奏する（上演する）－歌う、楽器で演奏するとき
<ul style="list-style-type: none"> <li>・適切なレパートリーを選んでください。</li> <li>・正確な技術で上演することによって、スキルを適用してください。</li> <li>・音楽の構造、文化、音楽の歴史の前後関係の理解を適用することによって、適切で表現力豊かな解釈を展開してください。</li> <li>・正確に音楽の楽譜を読んでください。</li> <li>・公演を評価して、洗練して、修正してください。</li> <li>・他の人のためにパフォーマンスを発表してください。</li> </ul>
応答する－知覚、分析、解釈、批判、音楽を判断するとき
<ul style="list-style-type: none"> <li>・聞くために、レパートリーを選んでください。</li> <li>・音楽の要素と構造を分析してください。</li> <li>・いろいろな音楽のスタイルを比較して、対比してください。</li> <li>・音楽の特定のスタイルを識別する、形式的で表現力豊かな性質を確認してください。</li> <li>・その文化的で歴史の前後関係の範囲内で、音楽を配置してください。</li> <li>・音楽のパフォーマンスと作品の技術的で表現力豊かな性質について、批評的な判断をしてください。</li> <li>・音楽への個人的な応答について、身ぶり、言葉、演奏、説明を使用してください。</li> </ul>

ここで芸術教育は、「ダンス」「音楽」「演劇」「美術」の4領域から構成されている。芸術の知識・技能を確実に習得し、「創造する」「演奏（上演）する」「応答する」という過程を辿り、高次の学力を育成するという筋書きが描かれている。ここには日本における確かな学力の育成との共通点を見いだすことができ、基礎的・基本的な知識・技能を習得し、それらを活用して思考力・判断力・表現力等を育成するという過程とも重ね合わせることができる。音楽評価の枠組が示す視座では、知識・技能を単独で用いることは無く、それぞれが相互補完あるいは、一連のファセット（輻輳）としてどの程度活用できているかどうかを見取ろうとする意図が読み取れる。また、その背景となる美学や歴史の知識理解を適用して学びが深まっているかどうかを評価しようとしている。

## 3. 実際の演奏をサンプル化したルーブリック例 ～実物・実演の評価規準～

国立教育政策研究所が作成した『評価規準の作成 評価方法等の工夫改善のための参考資料』（2011年3月）には、教師が評価規準を作成するときの参考になるよう、具体的な授業の場面や生徒の記述によるワー

クシートなどが示されている<sup>13</sup>。しかし、時間芸術である音楽、とりわけ演奏は、ワークシートのような記述物とは異なり、可視化し共有化することが容易でない。音楽表現の創意工夫といった知覚・感受については、言語で説明させたり記述させたりして可視化する手段に頼ってきた側面があった。国研の参考資料でも、ほとんどがワークシートへの記述例といっても過言ではない。

評価規準は教師の判断に依存するところが大きくなると、結果として教師の価値観や音楽観、好み等に左右され、信頼性が保てなくなる。演奏に対する評価の問題を克服するには、ワークシートのような記述物のサンプルよりもむしろ、生徒の実際の作品として、音源や映像など実物・実演のサンプルを通し、教師と生徒が評価規準を共有する取組が有効である。

この点において、NAEPのHPが提供する評価資料は有益だと考えられる。ホームページにおいて記述語で示されたルーブリックとともに、評価規準として音源や映像など実物・実演の「サンプル演奏」を示しているからである。表3は、第8学年対象の音楽のパフォーマンス「課題 ロックの即興演奏」の評価例<sup>14</sup>（ルーブリックの例）である。ロックの音楽形式をもとに、ドラムとコードが予め用意されている。生徒には、MIDIキーボードを用いてオリジナルの旋律を創作する課題が与えられている。注目すべきことは、4（大変優れている）～1（不十分）までの4段階の各規準は、記述語で示すだけでなく、生徒が作成したパフォーマンス（作品としての演奏）を音源として示しているところである。

表3 第8学年音楽：パフォーマンス「課題 ロックの即興演奏」評価の例（ルーブリックの例）

<p><b>4—大変優れている</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○いくつかの高度なピッチ（臨時記号）やリズムパターンを相対的にもっており、多様な単純なパターンを効果的に使う、工夫したパターンを効果的に使う。</li> <li>○音楽のスタイルのいたるところが適合しており、わずかな逸脱にとどまっている。</li> <li>○音楽の構造（形）がいたるところで適合しており、わずかな逸脱にとどまっている。</li> <li>○非常に魅力がある。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・独創性／創造性が強く見られる。</li> </ul> </li> </ul> <p>[評価規準のサンプル演奏]</p> <p><b>3—優れている</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○いくつかの高度なピッチ（臨時記号）やリズムパターンを相対的にもっており、多様な単純なパターンを効果的に使う。</li> <li>○音楽のスタイルが大体適合しており、いくつかの逸脱にとどまっている。</li> <li>○音楽の構造（形）が大体適合しており、いくつかの逸脱にとどまっている。</li> <li>○魅力がある（生徒が演奏したすべての割合を考慮すること）。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・独創性／創造力が若干見られる。 ・スキップ、シンコペーション、ピックアップノートの要素を使用している。</li> <li>・2つ以上の良い考えがある。 ・多様に細分されている。 ・大部分が即興でパフォーマンスしている。</li> </ul> </li> </ul> <p>[評価規準のサンプル演奏]</p> <p><b>2—ふつう</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○すべて4分音符を用いて、やや音楽に適合している、基本的で反復された音程やリズムパターンが見られる。</li> <li>○一部でテープの上で音楽のスタイルに適合している。</li> <li>○一部で音楽の構造（形）に適合している。</li> </ul> <p>例・4小節のフレーズで曲のはじめ、または曲の終わりがつくられている。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○いくつかの点で適合するところはあるが、多くの、魅力的な要素または特徴がたくさん見られるわけではない。</li> </ul>
--



・1つ2つの簡潔でよいアイデアが見られるが、次のような点でうまくいっていないことがある。(創作的な変形や音楽の要素の処理の仕方)

○一般に聴き手が興味を持ち続けることができなかつたり、少々音楽の要素からずれてしまつたりしている。

#### [評価規準のサンプル演奏]

##### 1-不十分

○ほとんどリズムや音色の形式が組み立てられていない。

○音楽のスタイルに適合しない。

○音楽の構造(形)に適合しない。

例・4小節のまとまりで演奏できていない。

・ビートがどう処理されているか分からない。

○アピール性がない。

・終始偶然性がいなめない。・単純すぎる。・あまりにも複雑すぎる。・リズムの問題(よい考えがない)は、全体的な印象をひどく損なうかもしれない。

・ピッチの問題は、全体的な印象をひどく損なうかもしれない。

例・生徒は、何度も同じ記譜を繰り返している。

・生徒は、極めて少ない単位で演奏している。

・生徒は、単に不注意な動機だけを含むパターンをランダムに実行している。

・生徒は、おなじみの(独創的でない)歌またはメロディーを演奏している。

生徒の学習状況において到達度の具体的な姿を明らかにするには、記述語によりパフォーマンスの特徴をありありと描くとともに、音楽科などで実演を組み合わせた方が有効な授業においては、音源や映像によって[作品ループリック]を示せば、評価規準を一層明確にすることができる。こうした実物・実演の評価規準により目指す姿を具体化することは、素晴らしいパフォーマンスの育成にもつながり、教師と生徒の間でのループリックの共有にも一役買うことになる。

## 4. ワシントン州公教育管理局のパフォーマンス課題

### (1) パフォーマンス課題

ワシントン州公教育管理局(Office of Superintendent of Public Instruction: OSPI)では、ホームページ上に教師が教育現場で活用することができるアイテムを数多く掲載し、アクセスすれば自由に活用できるシステムを構築している。パフォーマンス評価に関わるアイテムも充実しており、ここではサンプルを示しパフォーマンス評価の推進を図るとともに、教師がパフォーマンス課題やループリックの共有ができるように工夫している。こうした取組がパフォーマンス評価を普及させる原動力になっていると言われている。

ここでは、第5学年(Grade 5)用に示された「キャットフードのコマーシャル」(Cat Food Commercial)のパフォーマンス課題を取り上げ、検討することとする<sup>15</sup>。

表4 パフォーマンス課題「キャットフードのコマーシャル」

一流のキャットフード会社は、新しいキャットフード商品の名前をそのテーマ音楽を使うことで展開しようと考えています。キャットフード会社は、そのコマーシャルの音楽の作曲を小学生にやってほしいと考えています。あなたのクラスは、このコマーシャルでパフォーマンスするために選ばれました。キャットフードのコマーシャル・ディレクターは、あなたのクラス一人一人に、それぞれコマーシャルのための曲を書き、それを上演してほしいと思っています。

ディレクターは、テンポ、リズム、強弱がどのように新しいキャットフードと関係しているかということが分かるコマースシャルをあなたが創作し、上演することを求めています。ディレクターは、作品を上演する前に、あなたに練習時間を関与くれます。その後で、あなたの曲をディレクターに説明する必要があります。

表 5 課題の説明

ディレクターは、あなたがコマースシャルを創作する時に、次の課題を満たさなければならないと説明しています。

- ・新しいキャットフードの名前を選ぶ。
- ・2小節または4小節の長さで繰り返すオリジナルのコマースシャルを創作する。
- ・あなたのコマースシャルを、他の人が読み取ってパフォーマンスができるように五線紙に書く。
- ・あなたが選んだ楽器にふさわしい記号（ト音記号、バス記号、アルト記号）を選ぶ。
- ・あなたの選択した楽器に適合する記譜法を用いる。
- ・拍子記号を選ぶ。
- ・各小節に正確な拍を用いる。
- ・正確な小節線を示す。
- ・あなたのコマースシャルに下記の音楽要素を用いる。  
テンポ、リズム、強弱

ディレクターは、あなたのコマースシャルを上演する時に、次の課題を満たさなければならないと説明しています。

- ・オルフ旋律楽器・マンドリンバンド・スチームドラムバンド（旋律打楽器）、あるいはリコーダーを使う。
- ・適切な演奏の技能を示す。
- ・聴衆に自己紹介する。
- ・キャットフードの名前を紹介する。
- ・目立った状態で中断せずに演奏する。
- ・テンポ、リズム、強弱を使って記譜された曲を演奏し表現する。
- ・ふさわしい姿勢をする。
- ・選んだ楽器の適切な技術を示す。
- ・演奏への集中を維持する。
- ・演奏の終わりには聴衆に応答する。

ディレクターは、上演後の応答の際に、次の課題を満たすように説明しています。

- ・あなたの創作作品とパフォーマンスにおいて、音楽の要素がどのように使われたのかを説明しなさい。
- ・それらの要素が、キャットフードの新しい銘柄の特徴をどのように表現しているか説明しなさい。
- ・音楽用語を正確に使いなさい。

あなたは、コマースシャルを創作し、五線譜にそれを記して、あなたの教師のためにパフォーマンスする前にそれを練習します。あなたの演奏は、ビデオテープに録画されます。パフォーマンスの後で、あなたのコマースシャルについて応答する時間が与えられます。

表6 「応答」用のワークシート

	創作作品	パフォーマンス	キャットフードの 銘柄の特徴
あなたの商業でのテンポはどのように使われましたか。			
あなたの商業でのリズムはどのように使われましたか。			
あなたの商業では強弱はどのように使われましたか。			

上記の課題例は第5学年を対象としたものである。日本の小学校高学年の発達段階で求められる水準と比較すると、「オルフ旋律楽器・マンドリンバンド・スチムドラムバンド（旋律打楽器）、あるいはリコーダー」といった楽器を駆使して作曲するには、かなり高度な力が必要である。しかも、各楽器のもつ音域を理解していなければ、「ト音記号、バス記号、アルト記号」の3種類からふさわしい記号を選ぶことはできない。

逆に言えば、作曲家になったと仮定した場合、どのような手順で曲を創作していくのかをリアルに体験できるように詳細にわたって設定されていることが分かる。つまり、商業・ディレクターに仕事を依頼された作曲家の挑戦をリアルに体験させながら学びを深めるように考えられている。作曲家というリアルな存在を仮想する文脈を形成して、課題に「真正性」が生まれてくる。表5からも分かるように、「テンポ、リズム、強弱」という音楽の要素を用いる「制限」と同時に、「あなたが選択した楽器」というように「選択の余地」の両方があることにより、知的活動を発揮させる質の高い学力が求められている。作曲家の創造的な仕事という仮定を通し、より現実に密着した文脈の中で音楽の知識・技能に関する理解を深める学びが促され、それ以前に積み上げられてきた知識・技能のパーツが高次の学力として再構築されていくように設計されている。

「キャットフードの商業」のパフォーマンス課題は、「創造する（作曲する）」「上演する」「応答する」という3つの側面に照準を合わせて設計されている。つまり、最も目に見えやすい「パフォーマンス」のみを評価対象とするのではなく、五線譜に示された旋律、表6のワークシートにあるような、パフォーマンスまでの過程や内実を明らかにする作品をつくり、歩みを丸ごと評価するようにしている。評価される作品が何かを明確にし、これを多様な視点から評価をして、高次の学力についての評価が「信頼性」と「妥当性」をもって遂行できるように考えられている。

評価に「信頼性」と「妥当性」をもたせるには、ループリックの作成が大切であることは論を俟たない。以下、ループリックに関し、さらに検討を加える。

## (2) ループリックの作成と評価の信頼性と妥当性

OSPIは、パフォーマンス課題におけるループリックを「創造する、上演する、応答する」の3側面について、それぞれのループリックを詳細に示している。ここでは、表7のように「創造する（作曲する）」のループリック例のみを挙げて検討する。

このループリック例は、4～0のレベルの尺度と各レベルのパフォーマンスの特徴を説明する記述語から形成されている。このループリックでは、端的ではあっても抽象的である為に具体の姿が特定しにくくなるような表現はなく、何が満たされれば4の水準に達するののかのパフォーマンス要素が特定されている。本来、この要素の余すところのない特定にこそ、教科知・専門知が貢献するところとなろう。もちろんそれは、発達段階や習熟のレディネス、実際の授業経験のスペクトルに叶ったものでなければならない。

ここで、OSPIと日本で実践されたループリックとを比較してみたい。日本の方は、「魔王」(F. シューベルト作曲)の鑑賞を発展させる課題を「ディスクジョッキーになろう」と設定し、鑑賞した楽曲の特徴を他

者に伝えるという学習展開において用いられたものである<sup>16</sup>。

表7 パフォーマンス課題「キャットフードのコマーシャル」のルーブリック（創造する）

4	4点の応答：児童は、下記のリストから4つあるいは5つの課題の要求を満たすことによって、読みやすかつパフォーマンスが可能な創作作品を理解していることを示す。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・2小節または4小節の繰り返しからなるコマーシャルを創作し、名付けている。</li> <li>・適切な音部記号、拍子記号が正確な場所に配置され、創作作品が記譜されている。</li> <li>・正確に記譜し、正確に音符や休符を配置している（五線譜上の符頭、符尾、符鉤、休符の「体裁」と配置）</li> <li>・各小節に、拍の数や小節線の位置が使われている。</li> <li>・表現要素や音楽要素（テンポ、強弱記号と同様にリズム）が、正確に正しい位置に書かれてある。</li> </ul>
3	3点の応答：児童は、上に示された5つのリストから3つの規準を示す。
2	2点の応答：児童は、上に示された5つのリストから2つの規準を示す。
1	1点の応答：児童は、上に示された5つのリストから1つの規準を示す。
0	0点の応答：児童は、この課題にわずかな理解を示すかまたは全く理解を示さない。上の5つの規準のいずれも満たさない。

表8 日本の音楽科鑑賞の授業で用いられたルーブリック<sup>17</sup>

5 すばらしい	<ul style="list-style-type: none"> <li>・音楽を形作っている要素や要素同士の働きから楽曲を捉えることでイメージをもち、楽曲のよさや美しさについて主体的に味わっている。</li> <li>・楽曲のイメージを元に、誰もが理解できるような放送原稿を具体的にていねいに書いている。</li> </ul>
4 良い	<ul style="list-style-type: none"> <li>・音楽を形作っている要素や要素同士の働きから楽曲をとらえることでイメージをもち、楽曲のよさや美しさについて主体的に味わっている。</li> <li>・楽曲のイメージを元に、放送原稿を具体的にていねいに作成している。</li> </ul>
3 合格	<ul style="list-style-type: none"> <li>・音楽を形作っている要素や要素同士の働きから楽曲をとらえることでイメージをもち、楽曲のよさや美しさについて主体的に味わっている。</li> <li>・楽曲のイメージを元に、放送原稿を作成している。</li> </ul>
2 もう一歩	<ul style="list-style-type: none"> <li>・楽曲のイメージについて言葉を用いて説明することが不十分である。</li> <li>・文章（放送原稿）としては成立しているが、音楽を形作っている要素や要素同士の働きから楽曲をとらえることができていない。</li> </ul>
1 努力が必要	<ul style="list-style-type: none"> <li>・楽曲のイメージについて言葉を用いて説明することが不十分である。</li> <li>・文章（放送原稿）としては成立しない。</li> </ul>

米日の2つのルーブリックを比較すると、日本の授業で用いられたルーブリックには抽象的な表現が多いことが分かる。音楽科のような知覚・感受を基盤とする教科については、評価規準を文章に表現しづらいところがある。このように記述語で表記されていると、段階ごとに水準が異なることは理解できるが、実際、子どもたちのパフォーマンスのどこをどの視点から評価するかと突きつめられると、判然としない部分が出てくる。OSPIが作成したルーブリックは、チェックリスト型になっており、たいへん明確で具体的であるが、このチェックリストでは可視化しにくい質的な規準をさらにどのように加えていくかが課題となる。

これまでの音楽科におけるパフォーマンス評価研究にかかわり、小島律子によるルーブリック作成上の課題の指摘は、的を射ている。即ち、「ルーブリックの記述語は、抽象的であったり文章表現力に矮小化された記述語になっていたりする事例が目につく」ところであり、この問題の検討を通して、「ルーブリックの



記述語は音楽固有の学力形成を見通し学習経験と指導過程に密着し具体的でなければならない」とする指摘である<sup>18</sup>。一旦作成したルーブリックをさらに洗練し、常に改良を重ねていく手続きをモデレーションと呼ぶ。これは、評価者間で評価規準を比較・検討したり、同じパフォーマンスを評価し、評価規準のずれを修正したりして、評価者による評価の一貫性を確保することなどのために行われる。このように着地点をめざし、評価システムのメカニズムを創り出してることが、評価の信頼性や妥当性に応えることになる。

### (3) フィードバックとリハーサルの保障

パフォーマンス課題を遂行していくに当たり、教師の形成的評価と子どもの自己評価を一致させるには、両者の間でルーブリックを共有することが大切である。子どもたちが評価される視点を自覚し、その視点から自らのパフォーマンスを洗練することによって、教師の形成的評価と子どもの自己評価の密接な結合が生まれてくる。子どもたちとともにルーブリックをつくり変えていくには、教師の適切なフィードバックが欠かせない。ブルックハートは、フィードバックを戦略（タイミング、量、様式、発表相手）と内容（焦点、比較、機能、バランス、明確化、明細性、トーン）に分けて説明し、フィードバックのタイミングについて、「生徒が学習目標を忘れないうちに、生徒に対してフィードバックする」ことと、「生徒が行動を起こすまでに時間がある間に生徒に対してフィードバックをする」ことの2点を指摘している<sup>19</sup>。この指摘からもルーブリックに対して、精度の高いフィードバックが重要になってくる。

## Ⅲ 中学校音楽科鑑賞領域におけるパフォーマンス課題による授業開発

### 1. 単元の終末で身に付けた力を総合的に発揮するパフォーマンス課題による授業構成

「真正の評価」としてのパフォーマンス評価が音楽科にもたらすものとして次のことが考えられる。オーディエンスを想定したパフォーマンス課題への取り組みを通し、生徒たちは目的意識をもって主体的に音楽活動に挑み、様々な制限や自由選択の中で、学習した知識・技能を活かして創造し、洗練させていくことができる。これにより、音楽文化への主体的参加という新たなパフォーマンスの質、すなわち音楽科における新たな学力の質を措定し、生徒の学びをそこに焦点化させていく。これまで実践されてきた音楽活動を、自己探求・自己表現としての本来の創造的な音楽の営みへと深めることが期待される。

以下に鑑賞領域を取り上げ、従前に身に付けた音楽表現の知識・技能を活用すると同時に、ピアノ協奏曲の魅力を感じ批評できる力を身に付ける指導計画を開発することにする。

#### (1) 単元（題材）目標と評価方法

鑑賞領域においては、楽曲をアナリーゼし、作曲された楽曲の構造を理解し、そこから醸し出される音楽の雰囲気を感じ、演奏家（オーケストラ、指揮者）の個性的な表現の工夫を聴き取り、楽曲や作曲者の背景も理解しながら、言語活動を通して楽曲の批評を行うという授業の筋道を構想することができる。

- 「本質的な問い」：この楽曲には、聴衆を魅了するよう作曲者のどんな音楽的なしかけが施されているのか？
- 「永続的理解」：作曲者が意図的に仕組んだ音楽的なしかけ（音楽を形づくる要素や要素同士の働き）を知覚・感受し、それらが醸し出す特質や雰囲気を楽曲や作曲者の背景とも結びつけながら批評できることである。

鑑賞領域の評価のためのパフォーマンス課題の設定においては、GRASPS<sup>20</sup>の6つの要素を用いることとした。

表9 GRASPSの6つの要素を用いたパフォーマンス課題の設定

<p><input type="checkbox"/>パフォーマンスの目的 (Goal)</p> <p>「ピアノ協奏曲第2番」(ラフマニノフ作曲)について、楽曲の特徴を言語によって表現することをゴールとした。</p> <p><input type="checkbox"/>シュミレーションする役割 (Role) と対象となる相手 (Audience)</p> <p>役割は、地元テレビ局のコマーシャル・ディレクターに曲のCMを依頼された音楽家である。その相手は、地元テレビ局を視聴するテレビの視聴者である。</p> <p><input type="checkbox"/>想定されている状況 (Situation)</p> <p>テレビのコマーシャルで楽曲の特徴を解説することになるから、様々な世代の視聴者に対して、情報を丁寧に伝える状況が推測できる。</p> <p><input type="checkbox"/>生み出すべき作品 (Product Performance)</p> <p>生み出す作品は、プレゼンテーション(楽曲の特徴を描いたシート)である。楽曲を聴いた感想や曲の情報を伝えるのではなく、楽曲のもつ魅力を十分に伝えるプレゼンテーションを生み出す必要がある。</p> <p><input type="checkbox"/>評価の観点 (Standards and Criteria for Success)</p> <p>ラフマニノフが仕組んだこの楽曲の魅力を伝えるためには、自分の感想をまとめるのではなく、楽曲の音楽的構造、楽曲や作曲家の背景から自分はどうのようにこの曲の魅力を捉えることができるかが大切になってくる。楽曲の特徴を感受するために、音楽を形づくる要素や要素同士の関連から、音楽を知覚・感受し、それらが生み出す特質や雰囲気を感じ取り、それをもとに、自分なりにどのようなイメージをもつかということが大切である。この点が評価のポイントとなる。</p>
--

表10 パフォーマンス課題を取り入れた単元(題材)の構造図

単元(題材)の構造図	名曲をプレゼンテーションしよう ～ピアノ協奏曲の魅力を伝えよう～ ラフマニノフ作曲 ピアノ協奏曲第2番
第5時 鑑賞の能力	<p>ねらい:各グループが「曲の音楽的特徴」「曲の背景」「演奏者の演奏上個性」「ピアノ協奏曲の形態」の観点からパフォーマンスを行い、楽曲の特徴を人に伝えることができる。</p> <p>前時に完成させたパフォーマンスのリハーサル時間を確保し、最大限のパフォーマンスができるようにする。グループごとにパフォーマンスを発表する。発表の様子は、VTRに収録し記録として残す。仲間のパフォーマンスを参観し、ループリックに基づいての評価とよさや改善点などをワークシートに記入する。パフォーマンスに対しての評価について発言する生徒の様子も録画する。</p>
第4時 鑑賞の能力	<p>ねらい:「曲の音楽的特徴」「曲の背景」「演奏者の演奏上個性」「ピアノ協奏曲の形態」の観点からコマーシャルを作成し、リハーサルをすることができる。</p> <p>各グループでパフォーマンス課題に基づき、テレビコマーシャルで放映されるラフマニノフピアノ協奏曲第2番の解説を協同で考える。指定された項目について、今までの学習を活用してパフォーマンスを考える。この楽曲にとどまらず、2年生で学習した交響曲との比較やラフマニノフの他の作品とも関連づけながら曲の魅力に迫るパフォーマンスも取り入れるなど、様々な魅力を発信できる工夫をしたい。また、ループリックの確認をして目指す指標を把握する。この時間の中に必ず次時に向けたリハーサルの時間を位置付け、最大限のパフォーマンスができるよう配慮する。</p>
第3時 鑑賞の能力	<p>ねらい:ラフマニノフ作曲ピアノ協奏曲全楽章について、今までの学びを活用しながら聴き、楽曲の特徴を音楽の諸要素と背景と関連させながら、批評文を書き人に伝えることができる。</p>

辻井伸行さんの演奏でラフマニノフピアノ協奏曲第2番を鑑賞し、これまでの2時間の学習を活用して、それぞれの音楽の要素や要素同士の働きを根拠として、音楽を知覚・感受し、それらが生み出す特質や雰囲気から自分のイメージしたことを批評文としてワークシートに記入して、楽曲の批評を実施する。批評文については、自らが音楽評論家になったつもりで、他者にこの楽曲の素晴らしさや美しさを伝えるような批評文になるようにする。また、批評文では、キーワードとなる音楽の要素について示し、学習した重要な内容を落とさないように配慮する。

#### 第2時 音楽への関心・意欲・態度

ねらい：ラフマニノフ作曲ピアノ協奏曲の背景について探り、意欲的に楽曲のもつ特徴と関連させようとする事ができる。

ピアノ協奏曲第2番が作曲された背景について探る。交響曲第1番初演の失敗が原因でうつ病となり、その病気を克服した時に作られた曲である。その苦悩から喜びに至る経緯が曲に反映されている。また、ラフマニノフのピアノ曲には、しばしば「鐘の音と人の声」が楽曲の中で表現されている。また、1917年のロシア革命が起因し、アメリカへ亡命をしてその後祖国のロシアに帰国することはなかったという祖国への強い思いをもっていたこともラフマニノフの楽曲を理解する上で重要な要素となる。

#### 第1時 音楽への関心・意欲・態度

ねらい：ラフマニノフ作曲ピアノ協奏曲が多くの人々を魅了してきた楽曲の仕組みを意欲的に探ろうとすることができる。

ラフマニノフ作曲ピアノ協奏曲第2番が人々に愛される要因をラフマニノフが考えた音楽の仕組みから分析する。盲目のピアニスト辻井伸行さんがヴァンクライバーンピアノコンクールで優勝した本選で演奏した曲であったり、ドラマ「のだめカンタービレ」や映画などでも使用されたりしている。第1楽章から第3楽章まで全楽章についてNHK「名曲探偵アマデウス」での解説なども参考にしながら、楽曲の音楽的特徴を探る。楽曲の楽譜からもその特徴について把握する。

リアルな場面を想定したパフォーマンス課題にするため、地元テレビ局、地域の演奏会場名を挙げるなど、生徒が興味・関心をもって学習に臨めるようにする。また、知名度が高く、演奏会に足を運びたいくなるような世界で活躍する演奏家やオーケストラ名をパフォーマンス課題の記述文に挿入するようにした。設定したパフォーマンス課題は、以下の通りである。

表11 パフォーマンス課題

#### パフォーマンス課題

●地元のオーケストラは、10月の定期演奏会において、2010年ヴァンクライバーン国際ピアノコンクールで優勝した日本の盲目ピアニスト辻井伸行さんを招待して、このコンクールで辻井さんが演奏したラフマニノフ作曲ピアノ協奏曲第2番を長良川国際会議場において共演することになりました。そこで地元オーケストラは、大人だけではなく小学生から中学生にもこの演奏をぜひ聴いてほしいという願いをもっています。特に小学生にも分かりやすい曲の説明をしたいと望んでいます。東長良中学校では、中学校3年生でこの曲の学習をすることを知りました。そこで、学習成果を生かし、この曲の特徴を「曲の音楽的特徴」「曲の背景」「演奏者の演奏上個性」「ピアノ協奏曲の演奏形態」の観点から分かりやすく解説したコマーシャルをあなたが創作し、上演することを求めています。オーケストラの担当者は、コマーシャルを上演する前に、あなたに練習時間を与えてくれます。その後で、あなたのコマーシャルを地元テレビ局が撮影します。

表12 パフォーマンスの説明

<p>岐阜県交響楽団担当者は、あなたがコマーシャルを創作する際に次の課題を満たさなければならないと説明しています。</p> <p>① 「曲の音楽的特徴」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・第1楽章：旋律の上昇と下降、曲の頂点、テンポの揺れ、第1主題、第2主題</li> <li>・第2楽章：オーケストラとピアノの拍子のずれが生み出す効果</li> <li>・第3楽章：第1楽章の第1主題の変化、短調と長調</li> </ul> <p>② 「曲の背景」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ラフマニノフがうつ病を克服して満を持して作曲したこと</li> <li>・病気から克服するまでのストーリーが重ねられている</li> <li>・愛するロシアの原風景を表現したもの (ロシア正教会の鐘、別荘のある白樺の森など)</li> <li>・ラフマニノフの音楽には、「鐘の音と人の歌声」という概念がある</li> </ul> <p>③ 「演奏者の演奏上の個性」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・辻井伸行さんのピアノの「音色」、「指の動き」などの技術的な部分</li> </ul> <p>④ 「ピアノ協奏曲の演奏形態」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・交響曲とピアノ協奏曲との比較を通して、ピアノ協奏曲の演奏形態とその魅力を伝える。</li> </ul> <p>※あなたは、コマーシャルを創作し、コマーシャルで行う内容をワークシートに記入します。あなたのパフォーマンスは録画されます。その上で、あなたのコマーシャルについて仲間や教師からの質問に回答する時間が与えられます。</p>
--

## (2) 単元（題材）の展開

単元における指導の流れは、構造図（表10）で示した。ラフマニノフ作曲ピアノ協奏曲第2番を題材とし、「曲の音楽的特徴」「曲の背景」「演奏者の演奏上個性」「ピアノ協奏曲の形態」の視点について、授業の中で一つひとつ丁寧に聴き取り分析をしていき、楽曲の特徴をつかむ指導展開として構想してある。これらの視点をもち聴き取っていく中で、楽曲に対する自分なりのイメージが構築できるだろう。こうして聴き取った特徴をもとに学習してきた内容をまとめるために、グループをつくってパフォーマンス課題に取り組み、学習成果を明らかにするという展開にしてある。ルーブリックを作成するに当たっては、ワシントン州公教育管理局（OSPI）が作成したサンプルを参考にした。

表13 パフォーマンスの説明

5	<p>次の①～④までの課題について、4つすべての課題を満たしている。</p> <p>① 「曲の音楽的特徴」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・第1楽章において、第1主題、第2主題の旋律の上昇や下降、曲の頂点やテンポの揺れについて触れている。</li> <li>・第2楽章において、オーケストラとピアノ拍子のズレが生み出す効果について触れている。</li> <li>・第3楽章において、第1主題の変化、短調と長調が転調しながら展開する曲想について触れている。</li> </ul> <p>② 「曲の背景」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ラフマニノフの生涯やロシアの情景と関連付けている。</li> </ul> <p>③ 「演奏者の演奏上の個性」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・演奏家の演奏技術について触れている。</li> </ul> <p>④ 「ピアノ協奏曲の演奏形態」</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・交響曲とピアノ協奏曲との比較を通して、ピアノ協奏曲の演奏形態とその魅力を伝えている。</li> </ul>
---	--



4	上に示された4つの課題のうち3つの課題を満たしている。
3	上に示された4つの課題のうち2つの課題を満たしている。
2	上に示された4つの課題のうち1つの課題を満たしている。
1	上に示された課題に対して全く理解を示さない。上に示された4つの課題に対していずれも満たしていない

## 2. 実践事例

2012年11月、岐阜市立東長良中学校第3学年の学級において、上記の単元構想に基づき、チャイコフスキー作曲のバレエ音楽「くるみ割り人形」から「トレパック」を取り上げ、授業者の松岡直樹とともにパフォーマンス課題による鑑賞の学習展開を試みた。「トレパック」を取り上げた理由は、演奏時間が約2分と短いながらも、チャイコフスキーならではの多彩な音楽的創意が盛り込まれ、学習指導要領に示された〔共通事項：「強弱」「速度」「音色」「リズム」〕を視点として、根拠をもって批評するのに適切な楽曲であると捉えたからである。この学習展開では、小・中学校の9年間で身に付けてきた音楽の学力を総合的に駆使し、楽曲の分析を含めた鑑賞となることを目指した。

### (1) 「逆向き設計」論による単元（題材）指導計画の作成

「逆向き設計」論に基づき、4時間の構成で単元（題材）指導計画を表14のように作成した。鑑賞の学習では、音楽の諸要素（〔共通事項〕）に着目し、楽曲を分析的に捉え、言語による批評を通して可視化する方法がとられることが多い。しかし、言語による可視化は、自身の音楽意識を転換することはできても、どのように捉えたかをリアルに相手に伝えることに限界がある。そこで、図形楽譜（図1写真）を取り入れ、言語的な説明と組み合わせで批評するようにした。また、ワシントン州で示されていたプレゼンテーションのリハーサル時間を位置づけ、それぞれのグループの生徒が自信をもって発表に臨み、最大限のパフォーマンスが発揮できるように配慮し、単元（題材）指導計画を立案した。

表14 「逆向き設計」論により作成した単元（題材）指導計画

<p><b>【題材名】「名曲をプレゼンテーションしよう」</b></p> <p><b>【題材のねらい】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・楽曲の雰囲気や特徴を交流し合う活動を通して、音楽の特徴や構成を理解することができる。</li> <li>・総合芸術に親しみ、音色、速度、旋律、強弱などを生み出す音楽の特徴を物語の展開と関連付けてパフォーマンスを通して、楽曲を批評することができる。</li> </ul>
<p><b>【パフォーマンス課題】</b></p> <p>国際会議場大ホールにて、チャイコフスキー作曲「くるみ割り人形」のバレエ公演が開催されることになりました。公演主催者は、多くの人々で満席にできるようなコマーシャルを作ってほしいということです。コマーシャル中は、「トレパック」の演奏が流れています。「トレパック」の特徴を生かしたコマーシャルにしてほしいとのこと。今まで学習したことを生かし、この曲の音楽的特徴をパフォーマンスで創作し、上演することを求めています。地元ケーブルテレビ局があなたたちのパフォーマンスを撮影します。また、撮影の前にリハーサルの時間が確保されています。</p>
<p><b>（第4時）パフォーマンス課題による授業展開</b></p> <p>パフォーマンス課題に基づく各グループが作成したプレゼンテーションの発表を通して、楽曲の雰囲気や特徴を音楽の諸要素と結び付けて、自分なりの価値を考えたり、解釈したりして批評することができる。</p>

### (第3時) プレゼンテーションのリハーサルと修正

創作したパフォーマンスによるプレゼンテーションのリハーサルを通して、楽曲の音楽的特徴をよりリアルに表現するために修正を加えながら、グループのパフォーマンスを完成することができる。

### (第2時) 楽曲の特徴を生かしたパフォーマンスの創作

パフォーマンス課題に基づく楽曲の特徴を生かしたパフォーマンスをグループごとに創作することができる。

### (第1時) 図形楽譜による楽曲の特徴の可視化

パフォーマンス課題によるパフォーマンス作りのベースとなるように、様々な図形や色を組み合わせ、楽曲の音楽的特徴を可視化し、図形楽譜による楽曲の批評ができる。

## (2) 図形楽譜を取り入れた批評

音楽科の鑑賞領域では、生徒が批評を行う際、可視化するための方略として批評文や紹介文を書かせて取り組まれることが多かった。これは、新学習指導要領の「言語活動の充実」を実現することに起因している。しかし、言語での批評により、子どもの内面に広がったイメージや感受を外部に表現することは、容易でない。図形楽譜は、色紙を使用し、「かたち」「色」「動き」「大きさ」「量」のファクターによって音楽の特徴を表現する方法である。作成した図形楽譜を用いて、言語による説明を加えることで聴き手には楽曲の批評が理解しやすくなる。

実際に生徒は、グループでのコミュニケーション活動を通し、「トレパック」の音楽的特徴について、アイデアを凝らした図形楽譜を作成した。言語と自らが作成した図形楽譜との組み合わせた批評（表現）が、パフォーマンスの創造に効果を発揮するものとなった。



図1 生徒が作成した図形楽譜

## (3) 動画によるループリックの提示

今回開発した単元「名曲をプレゼンテーションしよう」のパフォーマンス課題において、ループリックは表15のように3段階で定めた。言語によるループリックの限界を打開し、生徒と教師が最終的に目指す姿を具体的に描くために動画によるループリックを示し、共有することにした。

実物・実演のループリック・サンプルとして示したものは、生徒がグラフィック・ソフトで制作した動画である。楽曲の音源ファイルとグラフィックを連動させ、曲の演奏に合わせて様々な図形が登場し、自由自在に動きを変えていくように作成している。この生徒は、静止画像としての図形楽譜を用いて楽曲を批評した学びを活用し、動画グラフィックによる楽曲の批評を試みたのである。「強弱」「速度」「音色」「リズム」といった音楽的な要素が、「かたち」「動き」「色」「量」「数」といったファクターにより動画として表現している。動画の方が静止画像よりも、豊かに表出できる音楽的な要素もあり、静止画像から動画グラフィックへの表現方法の変化だけでなく、ここには表現内容の高まりも認めることができる。実物・実演のループリック・サンプルを示すことの効果として、生徒は、記述語によるループリックよりもはるかに具体的で自分の目指す姿を明確にもって、パフォーマンス課題に挑戦することができた。



図2 生徒がグラフィックで表現した作品

表15 単元「名曲をプレゼンテーションしよう」ループリック<sup>21</sup>

A	◆次の4つの音楽的な要素を満たした、生徒が作成した動画による作品を鑑賞し、生徒とループリックの共有をする。
	次の①～④までの課題について、4つの課題のうち3つ以上の課題を満たしている。
	①強弱：楽曲が進行するに当たって、徐々にクレシェンドし、最後は華やかにffで終止する特徴を表現している。
	②速度：楽曲が進行するに当たって、アツチェレランドし、速度が速くなる特徴を表現している。
	③音色：登場する各楽器の音色、オーケストラの多彩な音色を表現している。
	④リズム：コミカルで軽快な主題のリズムをもつコサック踊りの特徴を表現している。
B	上に示された4つの課題のうち2つの課題を満たしている。
C	上に示された4つの課題のうち1つの課題を満たしている。

4つ[強弱・速度・音色・リズム]の音楽的な要素を視野に入れ、楽曲の特徴を動画グラフィックで表現した生徒は、技術・家庭科の学習で習得したグラフィック・ソフトの技能を日常生活でも磨き、それを活用して課題解決に向かった。真正の評価論に基づくパフォーマンス課題を導入することで、リアルな現実の生活や社会の文脈に接近することになるので、総合的な学習の時間だけでなく、教科の授業の中でも教科横断的な学びが実現されやすい。これこそが真正の学びと言ってよいだろう。リアルな社会で生きる力は、当該教科の枠の中では収まらない。各教科で学んだ力が相互補完的に関連し、学びの更新が行われ、「永続的理解」として定着していくような、学習文化の転換が必要なことが示唆されている。

#### (4) 多様なパフォーマンスによる批評

図形楽譜と批評文による楽曲の鑑賞を通し、楽曲の特徴を理解した上で、パフォーマンス課題（表14参照）に取り組むこととした。生徒の創造力が刺激され、各グループのパフォーマンスが多彩になり、この多彩さが学びを深める機会となった理由として、音楽の授業で身に付けた知識・技能等だけでなく、「演劇を学んでいる生徒」、「楽器を学んでいる生徒」、「バレエを学んでいる生徒」、「パソコンに興味をもち自分で高めてきた生徒」、「絵画が得意な生徒」、「語りが得意な生徒」など、生徒が従前において身に付けてきた様々な力を総合的に発揮して、楽曲の特徴を表現していることが指摘できる。

表16 各グループのパフォーマンスの内容

A 図形楽譜（色、形）、人形劇、楽器による演奏（サクソフーン、ヴァイオリン）を取り入れたパフォーマンス	D テレビショッピングの形態を取り入れたピクチャーストーリーを用いたパフォーマンス
B ピエロを主人公にした人形劇と遊園地に打ち上げられた花火をイメージした図形楽譜によるパフォーマンス	E プレゼンテーションソフトを使用したスライドショーによるパフォーマンス
C 操り人形（マリオネット）と実際のバレエの踊り、楽器演奏を組み合わせたパフォーマンス	F 実際の楽器による演奏を取り入れたパフォーマンス

表17は、授業を終えた後に生徒がワークシートに記入した批評文である。この生徒のケースでは、従来行ってきた鑑賞領域の文章による批評を超える価値に気付いている。操り人形を動かして表現したパフォーマンスが滑稽に映り、この滑稽さが農民の踊りであるコサックダンスを想起する効果をもたらした。打楽器のタンバリンは、「トレパック」の主題に取り上げられているテーマのリズムを強調する役目となり、この楽曲の反復されるリズムの効果を引き出すことにつながっている。また、実際のバレエの踊りが挿入されることにより、今回のループリック作成の視点である「強弱」「速度」「音色」「リズム」という音楽的な要素が、

バレエの動き一つひとつと関連づけて表現されることで、音楽とバレエ（舞踊）との結び付きをよく深く理解するものとなっていた。音楽的な要素の可視化をねらい多様な表現方法を組み合わせることにより、「トレパック」の特徴が実感を伴って鑑賞できているという手応えを掴むことができた。

生徒の批評文には、一連の「トレパック」鑑賞の学習を様々な表現の媒体を用い、総合的に表現したことにより、文章で批評するよりもさらに実感を伴って理解できたと述べられている。パフォーマンス課題に取り組んだ学習が、この生徒にとって「永続的理解」への一助となったことを示唆している。

表17 授業後にワークシートに記述した生徒Pの批評文

トレパックは、その音色、速度、強弱、リズムの反復全てが愉快で華やかな、思わず手拍子をとって踊ってしまいそうな、頭に残る曲想を表現しています。すべての音楽的要素をこの曲想に表現するために総動員しているような印象です。(略) C班は、人形、タンバリン、ダンスの3つを使ってプレゼンを行いました。操り人形で表現した人形の動きは、さまざまな動きをすることで曲の感じと合っていました。「くるみ割り人形」のコサックダンスを彷彿とさせました。「トレパック」は別名「コサックの踊り」だだと思います。そのこっけいな踊りとよく合っていました。タンバリンは特徴的な耳に残るリズムを表現していました。ダンスは、一緒に跳んだり、ステップを踏んだりその一つ一つの動作を音楽と合わせることで、音楽の「音色」「速度」「リズム」という要素を表現し、激しさからは「強弱」を表現しているように感じました。(略) Aさんの言ったように「学び」を「プレゼン」という形で表現することで、文章以上に相手に伝わり、また自分の理解も深まりました。(波線：筆者)

生徒たちとルーブリックを共有すると、生徒の自己評価力を育成し自己認識力を高めることができる。たとえば、ワークシートを活用し、生徒から生徒へのフィードバックや相互評価として実施することも可能である。生徒にとっても、鑑賞者である他班の生徒の評価記述の内容は、最終的な批評文としてまとめる際の参考にもなる。こうした評価の教育機能を組織することにより、メタ認知の育成のみならず、生徒が自己の高まりを客観的に捉え、成長の手応えを掴みながら高次の学力形成につながっていく。

音楽や様々な芸術の素晴らしさを後世につないでいこうとする意志の芽生えが大切だとするならば、「素晴らしい学ぶべき価値がある」との得心を深めていくことのできる学習展開をいかに構想していくことができるのか。この点において、すぐれたパフォーマンス課題を開発し、これを軸にして単元を組み立てることが有効である。チャイコフスキーのバレエ音楽だけでなく、バレエがもつ芸術性をも含めた舞台総合芸術の素晴らしさを深く理解するものとなるという、現実を見据えつつ理想を展望しながらの単元づくりを目指すにも、一連のパフォーマンス課題・評価の考え方は実践性に富んでいる。

表18 ルーブリックをもとにB班の生徒が相互評価した例

班名	コメント、もう一度見てみたい場面（評価の根拠）	評価（ABC）
A	ヴァイオリンとサックスの組み合わせが素晴らしい。人形の動きが曲のイメージと合っており、弾むところ、強弱を上下、左右の動きで表している。曲が盛り上がるころは人形の動きが大きい。	A
C	人形がくるくる回っている所が同じリズムの繰り返しを表していてよかった。人形の数が増え続けているところからも強弱の変化を感じ取れた。タンバリンの打つ音が増えているところからも強弱を感じ取れた。タンバリンが一番大きく強調したところでたたかれて効果的だった。バレエの踊りが楽しい雰囲気をつくっている。	A



D	曲の豊かさが表現できていました。華やかな所と静かな所の対比など。商品を販売する時にそのよさを分かりやすく伝えられていたから買いたいと思えた。	A
E	2回目にでてきた図形楽譜が共感できて、なるほどと思えた。プレゼンの文字の音楽からも曲のイメージが伝わる。みんなが注目していない観点からの説明が分かりやすい。	A
F	様々な楽器を用いて演奏している。そのフレーズの音楽にあった楽器を選び用いていたことがF班の感じた音楽のイメージが伝わってきた。また、最後に花をなげたことで曲の終わりを表現していました。最後も華やかに終わる様子が伝わってきた。	A

#### IV. 今後の課題

最後に、パフォーマンス評価の考え方にに基づき単元指導計画を開発する上での課題についてまとめることにする。

まず、単元の指導計画にパフォーマンス課題を組み込むと、通常の授業よりも知的活動性を発揮させ、それを評価するのに時間がかかる。中学校の音楽科は、年間35ないしは45単位時間しか配置されていないので、すべての単元（題材）で実践することは困難である。時数の少ない教科等においては、パフォーマンス課題と評価をどこに位置づけるかについて、年間指導計画で構想しておくことが望ましいだろう。

そもそも音楽科教師は、音楽科が目指している「音楽への関心・意欲・態度」、「音楽表現の創意工夫」、「音楽表現の技能」、「鑑賞の能力」の4つの学力について、何のために育成しているのかという問いに、十分に回答することができるだろうか。現在でも中学校では、合唱を中心とした「音楽表現の技能」に偏った実践が多くみられる。ねらいも曖昧なままであり、生徒の主体的な参加も乏しく、教師主導で演奏技術の向上に釘付けにされている。

各国の音楽教育のおかれた状況は厳しく、他教科との統合が進み、教科として単独で設置されている国は減少傾向にある<sup>22</sup>。未来を生きる子どもたちに、音楽を通してどんな力を育成していくことが必要なのかを考えていかなければならない。本稿では、パフォーマンス評価を切り口として、音楽科における思考力・判断力・表現力等、高次の学力を育成するための手法を考案してきた。その過程で、ESD（持続可能な開発のための教育）の考え方は、息の長い永続的な学力の定着、そして知的資源としての習得した知識・技能等の活用力をどのようにして育成するか、という知識基盤社会がかかえる教育課題とも無関係ではない。平成20年の中央審議会答申では、「このような社会においては、自己責任を果たし、他者と切磋琢磨しつつ、一定の役割を果たすために、基礎的・基本的な知識・技能の習得やそれらを活用して課題を見だし、解決するための思考力・判断力・表現力等が必要である。しかも、その知識・技能は、陳腐化しないように常に更新する必要がある。生涯にわたって学ぶことが求められており、学校教育はそのために重要な基盤である。」<sup>23</sup>とし、ESDとの関連が図られようとしている。生涯にわたって学び続けるために、「音楽を愛好する心情」に留まることなく、ルーブリック等により、実践力を可視化し音楽科の学びを構築していくことが大切である。

#### 【注】

- <sup>1</sup> 田中耕治『新しい「評価のあり方」を拓く―「目標に準拠した評価」のこれまでとこれから―』日本標準、2010年参照。
- <sup>2</sup> 長崎栄三「評価を活かす授業改善」教育調査研究所、第39回教育展望セミナー研究討議資料「評価を活用した学校改革」、2010年、102ページ
- <sup>3</sup> 前掲長崎、102-103ページ
- <sup>4</sup> 角野重樹（研究代表者）『学校における持続可能な発展のための教育（ESD）に関する研究〔中間報告書〕』国立教育政策研究所、2010年、第1部、4ページ。

- <sup>5</sup> 村木英治（東北大学教授）「全米学力調査（NAEP）概説－テストデザインと統計手法について－」東京大学第12回公開研究会資料、2005年、53ページ
- <sup>6</sup> 池田央「NAEP（全米学力調査）に学ぶ学力調査の技術－測定技量の進歩が未来の学力を提起する－」ベネッセ教育研究開発センター『BRID 2005 No.5』、2005年、3ページ（[http://benesse.jp/berd/center/open/berd/backnumber/2005\\_04/fea\\_ikedada\\_03.html](http://benesse.jp/berd/center/open/berd/backnumber/2005_04/fea_ikedada_03.html)、2013年1月31日アクセス。これ以下のホームページも同日に確認した。）
- <sup>7</sup> 同上。
- <sup>8</sup> <http://nces.ed.gov/nationsreportcard/pubs/strategies/>。
- <sup>9</sup> 同上。
- <sup>10</sup> 同上。
- <sup>11</sup> <http://www.nagb.org/content/nagb/assets/documents/publications/frameworks/arts-framework08.pdf>。
- <sup>12</sup> 同上。
- <sup>13</sup> 国立教育政策研究所教育課程研究センター『評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料（中学校 音楽）』、2011年、59 - 64ページ。
- <sup>14</sup> <http://nces.ed.gov/nationsreportcard/pubs/strategies/P1SDP2.asp>。
- <sup>15</sup> <http://www.k12.wa.us/Arts/PerformanceAssessments/default.aspx#Music>：ワシントン州公教育管理局のHP。表4～表7の記述は、小山英恵「音楽科においてパフォーマンス評価をどう行うか」日本学校音楽教育実践学会17回大会ラウンドテーブルⅣ発表資料から抜粋、小山氏からの同意を得て記述した。感謝申し上げます。
- <sup>16</sup> 西岡加名恵・田中耕治編著『「活用する力」を育てる授業と評価 中学校 パフォーマンス課題とルーブリックの提案』学事出版、2009年、81ページ。
- <sup>17</sup> 同上。
- <sup>18</sup> 横山真理・小島律子「パフォーマンス課題における音楽的思考過程の質的評価」大阪教育大学紀要第V部門第61巻第1号、2012年、60ページ。
- <sup>19</sup> Susan M. Brookhart: How To Give Effective Feedback To Your Students. ASCD, 2008, p.11.
- <sup>20</sup> 前掲西岡・田中、13-16ページ。GRASPSの6つの要素を織り込むことで、真正性（リアルさ）の高い課題を交差できると主張されている。
- <sup>21</sup> <http://www.k12.wa.us/Arts/PerformanceAssessments/default.aspx#Music>：ワシントン州公教育管理局HPのDeveloped Performance Assessments for the Artsを参照。指導案の作成当たっては、前掲西岡・田中編著の74～85ページを参照した。
- <sup>22</sup> 奥 忍「芸術関連諸教科の統合アプローチの検討－ドイツと台湾の例を参照しながら－」、日本音楽教育学会『日本音楽教育学会第43回大会プログラム冊子』2012年、106ページ。
- <sup>23</sup> 前掲角野（研究代表者）2010年、4ページ。

## 教師教育研究第9号掲載論文における訂正について

2013年3月刊行の教師教育研究第9号に掲載した、岐阜市立東長良中学校・薄田茂樹、教職実践開発専攻・原田信之共著論文「中学校音楽科鑑賞領域におけるパフォーマンス評価の導入」について、以下の通り、下線部分を加筆訂正させていただきます。

以下の通り、アンダーラインの部分を加筆します。

1. p.73 小山によれば、オーディエンスを想定したパフォーマンス課題への取り組みを通し、…。
2. p.82 注15 表4～7の記述と説明は、小山英恵「音楽科においてパフォーマンス評価をどう行うか」日本学校音楽教育実践学会17回大会ラウンドテーブルIV発表資料から抜粋、小山氏からの同意を得て記述した。感謝を申し上げます。

※上記について、教師教育研究第10号に掲載しております。